

その結果、拡張終期のパラメータは R-MBMGT 法により正確に求められ MGT 法では R-R 間隔の変動が少ない場合を除いて不正確になることがわかった。同一患者を同時に R-MBMGT と MGT 法で収集した左室容積曲線についても心房収縮期のピークが MGT 法では R-MBMGT 法に比較し低く観測された。

20. 心プールマルチゲート SPECT による心室壁運動の解析

間島 寧興 村田 啓 (虎の門病院・放)
外山比南子 (都養育院・核放)

複雑な収縮をしているものと考えられる左心室の収縮様式を、より詳細に解析するためには、従来の二次元解析法より、三次元解析法が適していると考えられる。今回、ゲート法を用いた、Single photon emission computed tomography (以下 SPECT と略) で作成した心プールの断層像を基に壁運動の三次元解析を試みたので報告する。rotating γ -camera・computer system を使用し、Tc-99m 標識赤血球を用いた gated SPECT で採取したデータを基に、体軸横断、矢状断、短軸断の各断層像を 1.2 cm 間隔の連続スライスで表示した。このスライスを基に、①収縮に伴う心室輪郭の経時的な変化、②面積中心の軌跡、③経時的な心室最大径の変化を求め、正常例と心筋梗塞例の解析を行った。

21. タリウム心筋 ECT による心筋梗塞の部位診断 —ECG, CAG, UCG 所見との対比—

岡部 昭文 相沢 忠範 藤井 諄一
小山晋太郎 加藤 和三 (心臓血管研究所)
佐々木康人 (東邦大・放)

心筋梗塞 (MI) 群 34 例と非梗塞 (N) 群 14 例を対象に ECT と Planar scan の梗塞診断における有用性を検討した。ECT では MI 群の 94%、N 群の 14% に欠損を認め、Planar では MI 群の 68%、N 群の 7% に欠損を認めた。その結果梗塞の存在診断の accuracy は ECT 92%、Planar 75% であった。ECT による梗塞の部位診断は 74% の例で ECG による部位診断と一致した。しかし ECG で診断した梗塞部以外にも欠損を認めた例があり ECT が相対的により広く梗塞巣を診断する傾向が

みられた。この傾向は一枝病変、多枝病変を問わず認められた。UCG でみた局所壁運動との対比では、akinesis, dyskinesis と ECT での欠損はよく対応し、ECT 診断の特異性の高さが示唆された。

22. リアグノスト、プロコラーゲン-III-ペプチド RIA キットの検討

辻野大二郎 千田 麗子 近藤 義任
柏田 和子 染谷 一彦 (聖マリア医大・三内)
佐々木康人 (東邦大・放)

Procollagen III N 末端 peptide (P III P) 測定用キットの検討と癌での血漿中 P III P 値測定の有用性を検討した。また同一検体で CEA, TPA, AFP, フェリチンを測定し比較した。対象は正常対照 18 例、各種良性疾患 58 例、癌 91 例である。測定の Between assay error は平均 10.9 で C.V. 18.2%、回収率は平均 107.6% であった。正常対照の血漿中 P III P 値は 7.56 ± 1.50 ng/ml ($\bar{m} \pm 1$ S.D.) であり、10.5 ng/ml を正常上限値とした。各疾患の血漿中 P III P 値は急性肝炎 20.6 ± 12.9 、慢性肝炎 14.4 ± 3.8 、肝硬変 26.6 ± 19.9 ng/ml、肝細胞癌 28.7 ± 14.8 ng/ml であり、転移性肝癌でも高値例がみられた。P III P 値はフェリチン値と有意の相関 ($p < 0.01$) を示したが CEA, TPA, AFP とは有意の相関はなかった。P III P の癌での陽性率は肝細胞癌 93%、胆道癌 89%、癌全体で 50% であった。良性疾患では肝疾患で 81%、全体で 62% の陽性率であった。血漿中 P III P 濃度測定による癌、非癌の鑑別は困難であると思われる。

23. Free T₃ RIA 測定法に影響をおよぼす諸因子

佐藤 龍次 九島 健二 伴 良雄
(昭和大・三内)

FT₃ 値に影響を及ぼす、アルブミン、脂質および溶血について検討するとともに、臨床例についても検討したので報告する。FT₃ RIA キットは、Amerlex (A), Immophase (I) キットを用いた。成績および考察：正常者の平均値は A で 3.8 ± 0.7 pg/ml, I で 4.6 ± 1.1 pg/ml、アルブミン添加では両者で、B/T % は低下し、アルブミン濃度と FT₃ 値は相関 ($p < 0.001$) を認め、肝硬変症では I で半数が低値を示した。オレイン酸添加では両者で